

第十一章 三國干渉ニ獨逸參加ノ真相

獨逸ノ領土慾

當時我國ニテ朝野均シク三國干渉ノ主動者カ獨逸タト信シテ居タ。獨逸公使カ林外務次官ニ述ヘタ脅迫的聲明ハ、ソレテ無クテモ興奮シテ居ル輿論ヲ更ニ刺戟スル底ノモノ故、政府ハ其ノ發表ヲ差控エタカ、此聲明ハ我當局ニ獨逸カ干渉ノ主動者タトノ信念ヲ益々堅メサセタ様ニ思ハレル。然シ其後ニ發表ナレタ文書等カラ歸納スレハ此ノ見方ハ不正確テ、殊ニ青木公使ノ報告ヤ意見ニ至ツテハ當時ノ反駁以上ニ偏狹無理解ノコトカ發見サレル、「カイザー」カ最高ノ政治感カラ露國ヲ支持シ、其目標ヲ極東ニ轉シサセテ、獨逸ノ東境ヲ安靜ナラシメヤウト考ヘタコトハ、確カニ露國ト共同行動ヲ採ルニ決シタ一大原因テ在ツタニ相違ナイ。此事ハ支那ニ長ク公使ヲシテ居テ當時極東通トシテ活躍シテ居タ「フォン、ブラント」氏カ、明治二十八年四月九日政府ニ提出シタ覺書中ニモ記載シテ在ル。併シ獨逸カ此決心ヲスルニ至ツタ經路ヲ通觀シテ考ヘルト、更ニ他ニ大キナ理由カ在ツタ様ニ思ハレル、是ハ植民地ノ爭奪戰ニ手遅レテ失敗シタ獨逸カ、此機會ヲ得テ領土的慾望ヲ極東ニ遂行セント試ミタノニ外ナラヌノテ、三國干渉ノ結果ハ膠州灣ノ租借ニ依ツテ實現セラレタノテアル。

明治二十七年ニ英國カラ韓國ノ獨立ヲ列強カ保障スルコト及清國ハ日本ニ軍費ヲ賠償スル事ノ二個條ヲ基

礎トンテ、交戦中ノ日清兩國ニ仲裁ヲ試ミントノ提議ヲ出シタトキ、獨逸カ未タ其時機テ無イト云フテ回避的回答ヲシタノハ事實テアルカ、恐ラク獨逸ハ英國ニ主動者ノ地位ヲ與ヘレハ同國ニウマイ汁ヲ吸ハレルト考ヘタタメ、自家ノ計畫未タ熟セヌ前ニ、斯クノ如キ發議ニ應スルノハ不利益タトノ見地カラ、之レニ贊成シナカツタモノト思ハレル。宰相「フォン、ホーヘンロー」公ハ十一月十七日外務大臣「フォン、マルシヤル」男ニ對シテ、「カイザー」ハ英國カ若シ上海其他軍略上ノ地點ヲ占領スレハ露佛モ亦之レニ倣フテアラウカラ、獨逸トシテモ年四億ノ商業ヲ保護スル爲、支那ノ一要地ヲ占領セネハナラヌ。之レニハ臺灣カ最モ適當ト思フカラ、佛國カ同島ヲ占領セヌ前ニ早ク日本ト協定シテ軍艦ヲ送レ、ト云ハレルカ、之レハ非常ニ重大ナ事柄タカラ決定ハ諸情報ヲ研究スル迄待ツテ貰フコトニシタト通牒シタ。外相ハ即日宰相ニ答ヘテ、英國カ支那ノ一地點ヲ占領スル模様ハ少シモ見エヌ、若シ英國カ占領シタラ露佛モ之レニ倣フカラ英國ノ爲却ツテ不利益テアラウ。英國ハ其強力ノ海軍力ヲ有スル故占領ノ必要ハナイ。併シ日清講和ノ際列強カ利害ヲ感スル可能性ハアルカラ、其際清國ニ於ケル獨逸ノ利益ヲ極力擁護スル様努メルノハ勿論タカ、獨逸カ臺灣占領ノ爲ニ日本ト協定スルカ如キハ到底不可能事テ、同島ハ日本カ戰勝ノ結果トシテ併合シ様ト考ヘテ居ル土地テ在ル許リテナク、此種ノ交渉ヲ目下獨逸カスルノハ他ノ列強カラ不信ヲ買ヒ、却テ我政策ノ遂行ヲ阻害スル結果トナルテアラウトノ意見ヲ述ヘタノテ、「カイザー」ノ考案ハ立消ヘノ形トナツタ。然シ清國ノ弱弊ヲ知ツタ獨逸カ同國ノ要地ヲ占領セントノ慾望ハ、膠州灣ノ租借カ出來ル迄寸時モ「カイザー」初メ獨逸官民ノ脳裏カラ離レタコトハナイ。天津駐在ノ獨逸領事ハ既ニ明治二十七年ノ正月ニ、占領スルナ

ヲ膠州灣カラ良イト云フ報告ヲシテ居ルカ、十一月ニハ在清公使カラ又同様ノ意見具申カ出テ居ル。越ヘテ翌二十八年二月一日獨逸外務大臣ハ在英大使ニ宛テ、獨逸ハ他國カ支那テ土地ヲ獲得スル場合之レヲ看過スルコトハ出來ヌ、其ノ軍艦ノ根據地トシテ商業保護ノ策動地トシテ在清公使ハ膠州灣ヲ推奨シテ居ルカ、近來連リニ傳ヘラレル英國占領ノ報道ハ事實ナルカト問合セタ。同大使ハ英國外務大臣「キムバレー」卿ニ對シ若シ或國カ支那ニ利益ヲ得ル場合ニハ獨逸モ亦其ノ保障ヲ得ネハナラスト述ヘタラ、同卿ハ之レヲ了得シ、清國ハ全權ヲ日本ニ送ラントシテ居ルカ露國ハ之レニ關シテ事態研究ノ爲意見ヲ交換セン事ヲ熱心ニ希望シテ居ルト告ケ、英國ハ獨逸カ意見交換ニ加ハルノヲ望ンテ居ル如キ印象ヲ得タト報告シテ居ル。之レニ追掛ケテ同大使カ本省ノ「フォン、ホルスタイン」參事官ニ宛テ出シタ私信中ニ、目下英露佛三國ハ協議中テ、其結果ハ知レヌカ、協議カ纏マラナケレハ獨逸ハ英國又ハ露國ト結シテ其發言ニ重キヲ置カセルノニ却テ好都合タト書イテ居ル。此準備行動テ用意ノ整ツタ觸逸ハ、前年十月ニ採ツタ態度ヲ捨テ積極的行動ニ移ルニ決シ、在英獨逸大使「フォン、ハツツフエルト」公ヲシテ三月一日政府ノ名ニ於テ左記要領ノ申入ヲ英國外務大臣ニ爲サシメタ。

獨逸ハ英國ノ如ク又恐ラク露國ノ如ク利害ヲ有セス、其商業關係上一日モ速カニ平和ノ成立センコトヲ希望ス、列國ハ確然タル計畫アルニ非ナレハ勝チ誇ル日本ニ干渉スルハ無效ノ試ミナルヘシ、支那カ壞頽ノ狀ヲ示シ第三國之レニ對應スル手段ヲ採ル場合ニハ獨逸又補償ヲ得サルヘカラス、斯クノ如キ際ニハ獨逸ハ英國ト共ニ行動センコトヲ希望ス。獨逸ハ共同干渉ノ考案ニ反対セス、英國若シ今ヨリ協議ヲ開カント

欲セハ之レニ應スヘシ。但シ此場合危險ニ對應スル補償ノ可能性アリヤ否ヤヲ計ルタス、行動ノ假想及其目的ヲ知ラント欲ス。

三月九日清國皇帝ハ「カイザー」ニ宛テ、其援助ニ依ツテ日本トノ和議ヲ進メンコトヲ乞フタノテ、獨逸當局ハ更ニ研究ヲ重ネテ同月十九日宰相カラ大體左ノ如キ意見書ヲ「カイザー」ニ提出シタ。

獨逸ハ英露ノ如キ利害ヲ極東ニ有セス、英露ト共ニ勝利ノ日本ニ干渉スルニハ戰爭ノ危險ヲ踏ムカ、少クモ軍事的示威ヲ要スヘシ。尤モ獨逸カ右ノ危險ヲ冒ス對價トシテ特ニ補償アラハ又格別ナリ。其補償トハ我艦隊ノ根據地トシテ又我商業ノ保護ノ爲支那ノ海岸ニ一地點ヲ得ルコト第一義ナリ。其地點ハ既ニ研究濟ナリ。勿論獨逸ハ主動者ノ地位ニ立タス他ノ行動ヲ待ツヲ要ス。青木公使ノ語ル所ニ依レハ日本ノ軍閥ハ旅順口及臺灣ノ併合ヲ欲ストノ事ナリ、「カイザー」自筆附記シテ、然ラハ臺灣ハ吾人之レヲ請求シ得ヘシ) 日本旅順口ニ占據セハ渤海灣ヲ制御スルコトトナリ從ツテ北京不安ナリ、故ニ無力ノ支那モ之レヲ承諾シ難カルヘク戰爭續クカト思ハル。此場合ニ利害ノ見地以外ニ支那問題トシテ獨逸ハ研究スルヲ要ス。獨逸ハ一方利害關係國タル見地ヨリシテハ此爭ニ深入スルヲ避クヘク、他方歐洲ノ大國タル立場ヨリシテハ極東事件ニ干與セサル可ラス。英國ハ露佛ニ對抗スル爲獨逸ニ着目シ居レリ。「カイザー」自筆、此代價高カルヘシ) 此代價ハ豫想シ難キモ在露英國大使ノ云フ所ニ依レハ、英國ハ露國カ北清ノ一部及朝鮮ノ一港ヲ併合スルモ不承知ナラサルヘシトノ事ナリ。英國ノ取ル所ハ明カナラスト雖モ(「カイザー」上海?) 或ハ舟山列島ナランカ、獨逸ノ占領スヘキ地點ニ關シ海軍官憲ト相談セルニ、「フォン、リヒト

「ーフェン」教授ノ意見ノ如ク臺灣佳良ナルモ、同島ニ付テハ日本ノミナラス佛國ト抗爭スル必要アリ。而シテ清國皇帝ニ對シテハ其不運ヲ悲ミ平和ノ遠カニ恢復サレンコトヲ祈ル旨ヲ返事シ、此趣旨ヲ日本ニモ傳達セルコトヲ附記セハ可ナラム。

獨逸カ英國ヲ去ツテ露ト握手セル原因

英露兩國間ニ意見ノ交換カ行ハレツツ在ルノヲ知ツタ獨逸ハ、一方英國カラ仲間外レノ取扱ヲ受ケヌ爲前記ノ行動ヲ採ルト共ニ、露國カラモ又疎外サレヌ爲、三月二十二日其在露大使ニ電報シテ、目下ノ英國ノ態度ハ不明タカ、新聞ニ依レハ露國トノ一致カ成立シタト云フ事テ在ル、貴官ハ政府ノ訓令シテ露國外務大臣ニ獨逸ノ支那ニ於ケル利害ハ露國ノ利害ト衝突シナイ、獨逸ハ露國ト意見交換ヲ爲ス用意カ在ルノミナラス、時宜ニ依ツテハ共同事ニ當ツテ差支ナイ、ト申入レヨト命シタ。此通告ニ接シタ「ロバノフ」外相ハ非常ニ満足ノ態テ、自分ハ露英ノ離間ヲ防ク爲日本ノ講和條件ニ關スル支那ノ希望ヲ英國ニ移牒スル積リタト語ツタカ、三月二十六日更ニ露國カラ、英國ハ日本ノ要求カ無理テナイコトヲ要ストノ通告ヲ露國ヨリ日本ニ申入レンコトヲ慾通シタ故、露國ハ之レヲ諾シテ在東京公使ニ訓令シタト知ラセタノテ、獨逸外務大臣ハ翌日東京ノ公使ニ獨逸ハ露國ト協議ノ上講和ニ先チ休戰セントスル支那ノ希望ヲ支持スルモノテ在ル、之レハ日本ニ無理ヲ云フノテハ無ク、之レヲ爲スコトカ講和ニ到達スル爲日本ノ利益タト考ヘルカラタトノ電報ヲ發シタ。

以上獨逸カ英國又ハ露國ト交渉シテ居ル日附カ下ノ關談判ト如何ニ關聯シテ居ルカヲ一目瞭然タラシムル爲、並ニ以下ニ掲タル諸交渉トノ關係ヲ闡明スル爲日清講和ニ關スル重要日附ヲ記載シテ見レハ左ノ通りテアル。

明治二十八年三月十九日	李鴻章下ノ關着
同 二十日	第一回講和談判、清國ヨリ休戰要求
同 二十四日	李鴻章遭難
同 二十八日	日本休戰承諾
同 三十日	休戰條約調印
四月一日	清國全權ニ日本講和條件交附
同 十七日	講和條約調印
四月二十三日	三國干涉
同 二十六日	日本ヨリ露國ヘ再考要求
同 二十七日	露國拒絕
同 三十日	我第一回回答（三國側不承諾）
五月五日	我第二回回答（奉天半島拋棄宣言）
同 八日	講和條約批准交換

獨逸側ノ記録ニ依レハ四月二日通商條約改正ノ事テ獨逸外務省ヲ訪問サレタ青木公使ハ「フオン、ミュールベルグ」參事官ト會商中、談偶々日清講和條件ニ及ヒ、同公使ハ、日本ハ金州半島ノ割讓ヲ要求スルカ、之レハ渤海灣ニ對スル一種ノ「ジブラルタル」ノ如キモノテ、此要地ヲ日本カ持ツテ居ナケレハ韓國ノ獨立ハ紙上ノ空論ト成ルテアラウ、露國ハ西比利亞鐵道ヲ「ボシエット」灣ニ達セシムル爲北滿方面ニ注目シテ居ルカ、之レハ日本ノ關スル所テハ無イカラ、支那トノ話合ヒテ決スレハヨイト語ツタトノコトテ、同參事官ハ之ニ意見ヲ附シ、露カ此計畫ヲ進ムナラ、英國ハ舟山列島ヲ占領スルタラウシ、佛國モ亦何地カラ取ルコトト思ハレルカラ、獨逸モ支那南東ノ要地ヲ獲得スル必要カアルカ、其準備ハ既ニ出來テ居ルト書テ居ル。此青木公使ノ談話ハ獨逸政府ヲ刺戟シタコト勿論テ、獨逸外相ハ早速在露大使ニ對シ、日本ハ旅順口ト其背後地要求ノ理由トシテ韓國獨立保護ノ必要ニ藉口シテ居ルカ、斯クスレハ旅順口ハ第二ノ「ジブラルタル」テ、渤海灣ハ日本ノ權内ニ入り、支那ハ事實日本ノ保護下ニ置カレルコトニ成ル、此ノ如キハ歐洲ノ平和ヲ危クスル底ノモノ故獨逸トシテ不安ナラサルヲ得ヌカラ、露國外相ト篤ト意見ヲ交換セヨト電命スルト同時ニ、在英大使ニ對シテハ、日本カ旅順口ヲ併合スレハ之レハ一種ノ「ジブラルタル」ト成ルカラ、北清ハ日本ノ保護ニ置カレ支那ノ存續ヲ危クシ、反面ニハ歐洲列強ノ領土計畫ヲ現實ニスルモノテ戰爭ノ危機ヲ蹙スト思フ、日本ハ露西亞カ西比利亞鐵道ノ港トシテ「ボシエット」灣ヲ利用スル爲北滿ノ領有ヲ要求スルコトト信シテ居ル、貴官ハ既ニ支那ノ分割問題カ既ニ露、英、佛ニ纏マツテ居ルカ否カラ知ル爲以上ヲ具體的ニ話題トシテ先方ノ口裏ヲ引テ見ヨト電訓シタ。英國外務大臣ハ獨逸大使ニ答ヘテ、未タ閣議ヲ經テ居ラヌカラ

純然タル個人トシテノ話ニ過キヌカ、日本ノ遼東半島併合ハ韓國ノ獨立ニ關スル露國ノ利益ヲ害スルカモ知レヌカ、支那ヲ危殆ニ陥レルトハ思ハレヌ、北京カ危ケレハ南京ニ遷都シサヘスレハ濟ムコトテ、英國ノ利益益ハ上海ニ集中サレテ居ル、ト譜ツタ由テ「フオン、ハツツフェルト」公ハ此報告電信ヲ四月六日ニ出シ其末尾ニ、英外相ノ談話ヨリ綜合シテ考ヘルト英國ハ何レノ列國モ支那ノ土地ヲ割取セヌコトヲ英國ノ利益ニ合スルモノト思フテ居ル模様テ、英國自身割取ノ意思ハ無イ様ニ思ハレルト附記シテ居ル。是レテ大凡英國ノ態度ノ見當カ付イタ獨逸ハ其領土的慾望ヲ充タス爲ニハ專ラ露國ト提携スルノ外ハ無イト決意シ、今迄ノ二重政策ヲ打切ラウトシテ居ル矢先キ、四月八日伯林駐在ノ露國代理大使ハ本國政府ノ訓令トシテ旅順口ヲ日本カ併合スルハ日清兩國ノ親善關係ヲ永久ニ阻害シ、極東ノ平和ヲ危殆ナラシメルモノテアルコトヲ、友誼的形式テ歐洲諸國カラ日本ニ勸告シ度イト申入レタノテ、「カイザー」ハ早速之レヲ承諾シ、英國カ之ニ加ハランテモカマワスト云フ腹テ、即日在東京獨逸公使ニ露國公使ト共同措置スヘキ様電令ヲ發シタ。而シテ之レト同日ニ英國政府ハ閣議ノ決定ヲ經テ、日本ノ講和條件ハ干涉ヲ必要トスル程英國ノ利益ヲ害シナイ旨ヲ、露、獨、佛ニ通告シタ。「カイザー」ハ在英大使ノ此報告電報ニ、英國カ確カニ日本ト密約ヲ結ンタロウト附記シテ居ルカ是レハ判斷誤リテ、香港ヲ持ツテ居ル英國ハ此上支那ノ領土ヲ獲得スル必要カ他國ノ様ニ無イノニ反シ、獨逸カ露骨ニ顯ハシタ領土慾カ實行サレルコトトナレハ、忽チ支那分割ノ端ヲ開キ、英國ノ商業利益ニ大損害ヲ與フルヲ虞カリ、今迄ノ態度ヲ改メタト見ルノカ至當タト考ヘル。

英國カ干涉ニ參加シナイトノ通知ニ接シタ露國ハ餘程考エタモノト見エ、四月十三日頃迄ハ其同盟國タル佛

國ニサエ何ノ意見ヲモ述ヘナカツタカ、遂ニ意ヲ決シ十七日ニ「ロバノフ」外相ハ在露獨逸代理大使ニ向ヒ、英國ノ不參加ハ露國ヲシテ其極東ニ於ケル利益ヲ擁護シ、同時ニ又歐洲ノ利益ヲ保護スル爲、露國自ラ行動スルノ義務ヲ生セシメタ、露國ハ日本ニ友誼的形式ヲ支那大陸ノ永久的領有ヲ斷念スル様勸告スルニ決心シタニ付テハ、獨佛兩國モ之レニ參加センコトヲ希望スル、若シ日本カ此勸告ヲ聽キ入レヌ場合ニハ、三國ノ聯合艦隊ハ示威運動ヲシテ滿洲ニ在ル日本軍ヲ孤立サセル計畫タト告ケタ。獨逸政府ハ一モニモナク之レヲ承諾シ、即日在東京公使ニ電報シテ、露佛公使ト共同シテ日本政府ニ同趣旨ノ勸告ヲ爲ス權限ヲ與ヘタカ、佛國カ露國ニ同意ノ返事ヲシタノハ十九日テアル。

以上ハ三國干涉ニ至ル迄獨逸ノ探ツタ態度行動ノ一班テ、主トシテ材料ヲ「ヂー、グローセ、ボリチク、デア、オイロベーエイシェン、カビネッテ」カラ取ツタノテアルカ、之レト寔々錄等ノ記載トヲ對比スレハ、當時我當局ノ見方カ餘リ肯綮ニ當ツテ居ラヌ様ニ思ハレル、殊ニ青木公使ノ報告ヤ意見ハ實ニ支離滅裂テ、就中四月二日「フォン、ミュールベルグ」參事官トノ會談ニ至リテハ我國ニ與ヘタ不利益甚大テアツタト考ヘル。又同公使四月二十日ノ電報ハ陸奥外相モ了解出來スト書テ居ル通り、筆者ニモ一向ニ腑ニ落チヌ。此電報ノ出タ動機ニ付テ獨逸側ノ文書ヲ參照スルニ、四月十八日青木公使ハ外務大臣ニ面會シテ日清講和成立ノ報ヲ傳ヘ、併セテ獨逸カ日本ニ好意ヲ示サンコトヲ求メタカラ、外相ハ獨逸カ前年干涉ヲ拒絶シテ日本ニ示シタ好意ニ對シ、今日迄未タ何等ノ對價ヲモ見出サヌノミナラス、先月干涉ノ形勢ニ關シテ爲シタ忠言ヲモ馬耳東風ニ聞キ流シテ居ル、ト反駁シタラ青木公使ハ此非難ノ根據アルコトヲ是認シ、獨逸ノ忠告ニ從フ様

政府ニ勸告スヘシト答エテ居ルカ、一體獨逸ノ求ムル對價ナルモノヲ知リツツ青木公使ハ四月二十日ノ電信ヲ打タノテアロウカ、果シテ然リトセハ我國ノ支拂フ代價ハ非常ニ高イモノテ、三國干涉ハ假リニ無カツタトシテモ、獨逸ノ臺灣占領ハ英佛ノ活躍ヲ誘致シ、露國モ亦躊躇シテハ居ナカツタロウカラ、戰ニ疲レタ我國ハ手モ足モ出ス、戰勝ノ結果ハ悉皆水泡ニ歸シ、韓國迄モ露國ノ勢力圈内ニ入ツタカモ知レヌカラ、筆者ハ如何ニシテモ青木公使カ臺灣ヲ獨逸ニ與ヘテ其歡心ヲ求メヨト政府ニ進言シタモノト考エル事ハ出来ヌ、又斯ク考エルコトヲ欲セヌ、然ラハ青木公使ハ如何ナ手段テ獨逸ニ禮ヲスル積リテ在ツタノカ、單ニ言辭ノ上ノ感謝テ獨逸カ滿足スル位ナラ、初メカラ干涉問題等ニ加ハリハシナカツタノタカラ、茲ニ青木公使ノ進言カ不可解トナルノテアル。ソレハ兎モ角トシテ半歲餘ニ亘リ折衝ヲ重ネテ居タ獨逸行動ノ消息カ、永年ノ間獨逸ニ居住シ、獨逸通ヲ以テ自認シテ居タ同公使ニ少シモ判ラス、露國ト共同シテ干涉スルニ決シ在京獨公使ニ電訓シタノモ知ラスニ、陸奥外務大臣ニ向ツテ好意ヲ要望シタ如キハ何ト云フ失態テアロウ。

三 國 干 涉 後 の 折 衝

露國ノ干渉提議ニ加ハツタ獨逸ハ、後日ノ好機會ニ支那ノ一地點ヲ占領スルコトニ付露國ノ豫諾ヲ同時ニ取付ケタカラ、今度ハ何カ共同ノ目的ノ爲ニ日本ト了解ヲ遂ケル方カ將來ノ爲得策タト考ヘ此方針テ進ムコトニ廟議ヲ決シタ。是レハ四月二十四日ノ事タカラ前掲斐々錄中ノ同月三十日發加藤駐英公使電報ニ書テ在ル獨逸大使ノ談話ハ右ノ方針ノ反影ニ外ナラヌカ、更ニ他ノ問題カ遼東還附ノ對價金額決定等ニ關シ獨逸カ

ラ好意ヲ我ニ示ス原因ト成ツタ。日本カ三國ノ勸告ヲ容レテ遼東半島還附ヲ承諾シタ後、還附條約カ清國ト調印サレタノハ明治二十八年十一月八日タカラ、此間相當困難ナ折衝カ關係國間ニ行ハレタノハ勿論テ、其ノ概要ヲ掲クレハ左ノ通リテアル。

三國公使ハ五月三十日左ノ質問ト要求ヲ我霞ヶ關ニシタ。

一、遼東半島拠棄ノ報償トシテ、日本政府ハ何程ノ償金ヲ清國政府ニ請求スル積リナルヤ。

二、目下ノ遼東半島ニ駐留ノ兵ハ、何時頃迄ニ引揚クル見込ナリヤ。

三、三國政府ハ臺灣ト清國間ノ海峽ノ航海ヲ自由ナラシムルコトニ付日本政府ヨリ保障ヲ得タシ。

右ニ對シ帝國政府ハ七月十九日左ノ宣言ヲ三國公使ニ口達シタ。
帝國政府ニ於テハ遼東半島ニ關スル未決問題ヲ、成ルヘク速ニ辦理スルコトヲ關係諸國ニ取り利益ナルヘシト認メ、且ツ三國政府ニ於テ平生懷ク所ノ友情ニ顧ミ、之レニ向ツテ重ネテ其尊重スヘキ帝國政府ノ和衷ノ意ヲ證明セント欲スルヲ以フ、帝國政府ニ於テ不日直接ニ清國ト成シ遂ケントスル談判ヲ開クニ先チ左ノ宣言ヲ爲ス。

第一、奉天半島ノ永久領有權ヲ拠棄スルノ報酬トシテ、日本國ヨリ清國ニ對シ要求セムトスル償金額ヲ定ムルニ當リ、帝國政府ニ於テハ今拠棄セントスル土地ノ實價ニ等シキ金額ヲ辨償セシメムトセバ、清國目下ノ内情ニ於テ頗ル困難ヲ感スヘシト慮リタルヲ以テ、帝國政府ハ清國ノ財政ヲ酌量シ大ニ其正當ナル要求ヲ減却シ、追加償金ノ額ヲ庫平銀五千萬兩ト定メタリ。

第二、帝國政府ハ奉天半島全部撤兵ノ第一着手トシテ追加償金庫平銀五千萬兩ノ支拂ヲ受ケ、且ツ下ノ關條約ニ規定シタル軍費賠償金ノ第一回拂込了リタル時ハ、其占領軍隊ヲ金州半島境界内ニ撤回スヘシ、又右軍費賠償金ノ第二回拂込ヲ了リ且ツ下ノ關條約ヲ以テ速カニ締結スルコトヲ規定セラレタル通商航海條約ノ批准交換ヲ了シタル時ハ、全然奉天半島ノ撤兵ヲ爲スヘシ。

第三、帝國政府ハ三國政府ノ請求ヲ酌量シ、且ツ一般ノ國際通商ノ利害ヲ慮カリ左ノ如ク宣言ス。

帝國政府ハ臺灣海峡ヲ以テ全ク各國公共航路ト認メ、隨テ該海峡ハ獨リ日本國ノ專有又ハ管轄ニ屬スルモノニ非ラスト宣言ス。

帝國政府ハ臺灣又ハ澎湖島ヲ他國ニ讓與セサルヘキコトヲ約ス。

九月十一日三國公使ハ右ノ宣言ニ關シ左ノ如キ回答ヲシタ。

一、從來本日帝國政府ハ節制ト公平トヲ重ンスルノ精神ヲ表明シテ、以テ文明世界一般ノ尊敬ヲ博シタルハ最モ當然ニ屬スルモノニシテ、今ヤ三國政府ハ此精神ニ訴フルモノナルカ故ニ、日本帝國政府ニ於テ遼東半島還附ニ對シ定メラレタル金額ヲ欣然減セラルヘキハ、三國政府ノ信シテ疑ハサル所ナリ、隨テ三國政府ノ意見ニ於テハ日本帝國政府ニ於テ之レカ爲要求セラルヘキ報酬ハ三千萬兩ヲ超過スヘカラス。

二、三國政府ニ於テハ半島撤兵ノ條件ヲ定ムルコトト、日清兩國間今將ニ商議セントスル通商條約調印ト

ノ間ニハ、何等ノ關係ヲ設ケ得ヘシト認メス、因テ三國政府ハ本日帝國政府ニ於テ速ニ本件ヲ確定スル

第一章 三國干涉ト獨逸參加ノ眞相

ヨリ生スル所ノ各種ノ利益ヲ確認セラレ、前記三千萬兩支拂後直ニ撤兵ヲ實行シ得ル様、早日ヲ以テ該撤兵ノ期限ヲ確定セラレンコトヲ希望ス。

日本政府ハ右ノ要求ニ抗争スル力カ無イノテ、撤兵期限ヲ三千萬兩支拂後三個月ト定メタ外、全部之レヲ承諾シ、其代ニ還附地ノ不讓渡規定ヲ挿入セント試ミタカ、是亦露國ノ反對テ成立セス、斯クシテ遼東半島還附條約ハ出來上ツタノテ在ルカ、實ニ悲慘ノ極ト云フノ外ハ無イ。

獨逸ノ態度

臺灣海峽ノ航行自由並ニ同島及澎湖島ノ不割讓ヲ要求スル時、三國側ハ此二島無防備ノ約束ヲモ含ム趣旨タト述ヘタカ、我國トシテ斯クノ如キ制限ヲ受諾スルコトハ出來ヌカラ、之レハ斷絶拒絶スルニ覺悟シタ。然ルニ此問題カ殆ント議論ナク立消エノ姿ト成ツタノハ獨逸ノ行動カ與カツテ大ニ力カアツタノテアル、元來此問題ハ佛國ノ主張ニ出タモノテ、露國ハ熱心ニ佛國ヲ支持シタカ、之レハ專ラ印度支那ニ植民地ヲ有スル佛國ヲ利スルニ過キヌトノ見地カラテモアロウカ、獨逸ハ一向ニ乘氣ニ成ラス、三國干渉ノ時ノ協定事項外タト云フテ異議ヲ唱ヘタ結果、無防備ノ件ハ到底日本カ承諾スマシトノ前提テ公然之レヲ提出スルヲ止メ、又不割讓ノ件モ強ヒテ云フコトニセヌ意味テ提出シテ見ルコトニ折合ヒカ出來タノタツタカラ、三國公使提出ノ第三項其モノト、提出ノ時ニ與ヘタ説明トノ間ニ大キナ開キカ在ツタ譯タ。若シ青木駐獨公使カ獨逸外務省ト密接ノ聯繫ヲ取ツテ居タラ、必スヤ獨逸側ハ誇リ顔ニ其内情ヲ語リ我ニ恩ヲ着セタコトアロ

ウ、ソシテ不割讓宣言ノ如キモノハ之レヲ爲サスニ濟ンタコト確信スル。

更ニ遼東還附ノ對償金額ニ付テ、露國ハ之レヲ過大ナリトシ其半減ヲ強固ニ主張シタノニ對シ、獨逸側テハ五千萬兩ノ要求ハ決シテ高クハ無イ、遼東ハ軍略上ノ地點テ其領有ハ常ニ北京ノ脅威ト成ルノテアルカラ、之レカ拋棄ハ勝利ノ最モ重要ナ成果ヲ日本カラ奪ヒ去ルモノテ、要求ノ金額ハ頗ル至當タ。日本政府カ輿論ノ激昂ヲ鎮靜スル爲ニ提出シタ此要求ニ反對スルノハ、單ニ穩當テ無イ許リテナク、日本ニ遼東還附ヲ勸告スル時三國ハ其對償トシテ下ノ關條約ノ定ムル戰債賠償ノ補充ヲ要求スル權利ヲ日本ニ與ルノニ一致シタノタカラ、五千萬兩ハ即チ戰債賠償ノ増額タルニ過キヌノテ、遼東撤兵ニ依ル威海衛撤兵ト同様ノ原則ヲ適用スルコトハ、三國ヲ指導スル見解ト一致シ衡平ノモノタト主張シ、我提案ノ殆ント全部ヲ支持シタノテアル、佛國モ亦五千萬兩ヲ左程高イトハ思ツテ居ラナカツタ様ニ見エルカ、獨逸ノ此態度ニ非常ニ憤慨シタ露國ハ、折衝ノ末三千萬兩ニ折合ハセ、又其支拂後直チニ撤兵スル様要求スルコトニ纏メタ、之レハ八月二十二日ノ事テアル。然ラハ何故獨逸カ本件ニ關シテ露國ニ反抗シタカ、其原因ハ三國干渉後間モ無ク露國カ獨逸ヲ除外シ佛國ノ金力ヲ背景トシテ支那公債ノ話ヲ進メタカラテ、之レヲ知ツタ獨逸ハ頗ル激昂シテ六月七日在東京公使ニ電報シテ、支那ハ大公債ヲ發行スル必要カ在ルニ就テハ、此問題カ解決スル迄占領地ノ撤退ヲ聞カヌ様日本ニ勸告セヨ、貴官ハ追テ何等ノ訓令ニ接スル迄病氣ヲ口實トシテ露佛公使ノ話合ヒニモ加ハルナト命令シタノニ見ルモ、其一班カ窺ハレルト思フ、此件ヲモ當時未タ幼稚タツク我外交カ千萬兩位ハ損ヲシタ様ナ感シカスル。

獨逸ノ膠州灣占領準備

筆者ハ曩ニ獨逸カ露國ノ干涉提議ニ加ハツタ最モ主ナ動機ハ其領土慾テ、之レハ膠州灣ノ租借ニ依ツテ解決シタト述ヘタ。獨逸カ支那ノ一要地ヲ占領スル爲盛ニ英國ノ瀕踏ヲシタ狀況ハ既ニ書イタカ、其當時即チ明治二十八年三月二十一日獨逸ノ外務大臣カラ海軍大臣ニ宛テテ、清國ハ講和全權ヲ日本ニ送ラントシテ居ルカ此談判ハ相當困難クラウカラ、干涉ノ問題カ起リ從ツテ補償ノ問題モ起ルコトト思ハレル、獨逸ハ干渉ニ加ハリ其補償トシテ支那ニ土地ヲ獲ント欲ス、最近在清公使カラ膠州灣ヲ推舉シテ來タカ、臺灣ハ如何カト思フニ付テハ篤ト研究シ速カニ報告アリタイトノ公信ヲ出シタ。海軍大臣ハ種々ノ地名ヲ擧ケテ返事シテ居ルカ、其翌月即チ四月二十六日「カイザー」ハ露帝ニ親翰ヲ送リ、恰モ自分カ露國ノ爲ニ遼東問題ノ落着ヲ喜ンテ助ケシ如ク、露帝ニ於テモ亦獨逸カ露國ニ無害ノ一港ヲ支那ニ獲得シ得ル爲助力アリタイト述ヘ、三國干涉ノ對償ヲ要求シタ。露帝ハ之レヲ快諾スル返事ヲ出シタカ、外務大臣ニモ一切知ラセナカツタトノ事タ。其後「カイザー」ハ如何ナル小事件テモ支那ニ起ル毎ニ東洋艦隊ニ出動準備ヲ命スルヲ常トシタカ、一方外務省カラハ明治二十八年十月二十五日在清公使ニ宛テ、極東ニ強力ナ艦隊ヲ斷ヘス持ツテ居ルノハ、獨逸ノ通商ヲ保護シ其政策ヲ遂行スルニ必要ナコト勿論テ、獨逸カ三國干涉ニ加ハツタ理由モ茲ニ在ルノタカラ、艦隊ノ根據地ヲ獲ル爲支那ノ意図ヲ探レ、ト命令シタ。此訓令ヲ受取ツタ「フォン、シェンク」公使ハ總理衙門ト交渉シタカ、支那側テハ到底承諾出來ヌト斷ハリ、理由トシテ他國カ其例ニ倣フタラウト

云フ點ヲ強調シタノテ、同公使ハ英佛兩國ハ既ニ極東ニ植民地ヲ持ツテ居リ、露國モ最近其艦隊ノ冬期繫泊港トシテ膠州灣ヲ借り入レタカラ、最早獨逸ノ例ニ倣ハントスル何國モ無イテハナイカ、清國カ若シ割譲ヲ不便トスルナラ或年限間ノ租借テモ充分タト申入レタカ、話ノ折合セハ無論容易ニハ着カヌ、恰モ關稅引上問題ノ爲李鴻章カ伯林ニ來タノテ、明治二十九年六月十九日李ト會談セル「フォン、マルシャル」外相ハ話題ヲ此問題ニ轉シ、獨逸カ三國干涉ニ加ハツタノハ極東ニ於ケル列強間ノ均勢ト支那ノ領土保全トヲ主眼トシタモノテ、去年三月日本ニ對シテ萬一大陸ヲ占有スル様ナコトカアレハ干涉カ來ルタラウト警告シタノモ全ク此見地カラテ在ル、獨逸ハ支那ト益々經濟關係ヲ密接ニシ様ト考ヘテ居ルカ、其爲ニハ艦隊ヲ保護スル地點カ無クテハナラヌカラ、此地點ノ占領ハ獨逸ノ不變ノ希望テ、之レヲ前提トスルモノテナケレハ如何ナル他ノ商議ニモ入ルコトカ出來ヌ、ト述ヘタ。李ハ是迄支那側テ云フテ居タ他國トノ關係ヲ繰返シテ縷陳シ、外相又之レニ應酬シタ後、獨逸ハ其商業ヲ保護スルト同時ニ遼東問題ニ依ツテ創マツタ獨逸ノ極東政策ヲ遂行スル爲海軍根據地ヲ持ツ必要ヲ生シタノタ、ト恩威併セテ強辯シタカ、未タ李ヲ承服サセルコトハ出來ナカツタ。斯クスル内海軍根據地トシテノ良港ニ關スル獨逸ノ調查ハ大分進捗シ、愈々膠州灣カ一番良イ、之レハ港其ノモノノミナラス位置ノ上カラ英國ヤ佛國カラ邪魔サレル虞カ少ナク、今此港ハ露國カ一時借り入レテハ居ルカ、露國ニ旅順口ト大連ノ自由權ヲ認メレハ却テ喜フコトト思フ、ト云フ支那稅務司「デットリンダ」ノ意見ニ極東艦隊司令官「フホン、チルビッツ」少將モ亦海軍軍令部モ同意シ、斯クテ政府ノ方針ハ決定シタカ、「カイザー」ハ俄カニ廈門占領ノ意圖ヲ宰相ニ述ヘ至急其決行ヲ促シタ、宰相ハ同地占領ノ不得

策ナ所以ヲ開陳シ、力ヲ盡シテ之レヲ阻止スルト同時ニ、占領ヲ實行スルニハ何カノ事件ヲ捉ヘテ報復手段ノ口實トセネハナラヌ、ソシテ此口實ノ原因ハ從來ノ經驗上宣教師同題等テ間モナク起ルタロウトノ意見ヲ上申シタ、是レハ明治二十八年十一月ノ二十八日ノ事テ、「カイザー」モ此意見ニ聽從シ、何事カ機會アラハ膠州灣ヲ占領スルコトニ十二月十五日廟議確定シタ。

獨露ノ妥協

ソコテ翌三十年六月露國ト交渉ヲ初メタカ、是亦容易ニ纏マル見込カ立タヌ、恰モ同年八月「カイザー」ハ「ペテルホフ」ニ露帝ヲ訪問スルコト成ツテ居タノテ、此機會ヲ捉ヘテ「カイザー」ハ露帝ニ膠州灣保持ノ意思アルヤ否ヤヲ聞イタラ、「ツアーハ北方ニ他ノ良港ヲ獲ル迄ハ離サヌト答ヘ、「ムラヴキエフ」外相ハ露國ハ膠州灣ヲ永久ニ占領スル考ヘハナイ、他ニ良港ヲ獲ツテ不要トナツタ場合ニハ英國ニ取ラセヌ爲獨逸ニ引繼クヘシト敷衍シタ。

斯クノ如クシテ膠州灣占領ニ關スル獨逸ノ計畫ハ着々トシテ歩ヲ進メ、其準備ヤ交渉モ先ツ出來タ時、宰相カ豫言シタ獨逸宣教師殺害事件カ明治三十年十月初山東省ニ起タノテ、同月六日「カイザー」ハ外務省ニ對シテ、今ヤ極東政策ヲ實行スル好機會カ來タカラ直チニ軍艦ヲ膠州灣ニ送レト命令スルト同時ニ、東洋艦隊司令官ニ全艦隊ヲ率ヒテ膠州灣ヲ占領スヘシトノ直電ヲ發シ、他方露帝ニ宛テ膠州灣ニ獨艦派遣ノコトヲ報スル親電ヲ送ツタ。然シ曩ニ述ヘタ如ク同灣ハ既ニ露國カ借受ケタモノ故、一應詰合ヒハ在ツタシテモ中

タスマラストハ運ハヌ、結局獨露妥協ノ歸着點ハ、支那ノ負擔ニ於テ露國カ膠州灣ヲ拋棄スル代價ヲ求メルニ終ル外ハナイ。同年十二月十四日露國外務大臣ハ獨逸大使ニ獨逸ノ膠州灣占領ニ鑑ミ露帝ハ清國政府ノ同意ヲ得テ、一時旅順口ニ投錨碇泊スル様其太平洋艦隊技隊ニ命令ヲ下シタ、露帝ハ露獨カ極東ニ於テ互ニ提携スルヲ要シ、且ツ提携シ得ヘキヲ確信シ、之レヲ獨帝ニ告ケンコトヲ貴大使ニ委嘱ス、トノ書翰ヲ送ツタカラ「カイザー」ハ折返シテ露艦ノ旅順口着ヲ祝シ、獨露兩國ハ渤海ノ入口テ極東ニ十字架ヲ保護シ、亞細亞大陸ヘノ門戸ノ守備ヲ代表スヘシ、陛下ハ屢々自分ニ暗示セラレシ計畫ヲ實行セラルヘク、之レヲ遂行シ成功セラルニ充分堪能ナルヲ確信ス、吾カ同情ト援助トハ必要ノ場合必ス期待ニ背カサルヘシ、トノ親電ヲ露帝ニ送リ極力其歡心ヲ購フニ努メタ。然ルニ獨逸ノ軍事教官等カ北清地方ニ雇傭セラレテ居ルノヲ見タ露國ハ、全滿洲、直隸省及支那土耳其斯坦ヲ含ム北清ハ、露國ノ專屬勢力範圍タトノ原則ハ獨逸政府ニ依リ實際上承認サレテ居ル、此原則ヨリ出發シ露國ハ是等諸地方ニ外國ノ政治的勢力ヲ許スコトハ出來ヌト抗議シタ。「カイザー」ハ此露國公文ノ一隅ニ、斯クノ如キ原則ヲ露ノ云フカ如ク實際上承認シタ様ナ事カ在ルカ記憶セヌト注記シ、又獨逸カ膠州灣ニ關シテ完全ニ満足ヲ得ル迄露ノ云ヒ分ヲ聞クコトハ出來ヌ、日本ノ勢力モ亦減殺シテハイケヌ、「與ヘ且取ル」ノカ必要タト書き加工テ居ルカ、此ノ様ナ經緯ノ後膠州委附條約ハ明治三十一年三月六日調印サレタノテアル。此ノ條約ノ前文ニ「清國政府ハ從來獨逸國ノ表明セル厚誼ニ對シ尙一層其ノ感謝的承認ヲ顯示スルコトノ妥當ナルヲ信シ」ト特記シタノハ、赤裸々ニ獨逸カ三國干渉ノ報酬問題ヲ之レニ依テ解決シタコトヲ表明スルモノテ、露國ノ對滿政策ハ早晚豫定ノ經路ヲ辿ツタカモ

知レヌカ、獨逸ノ行動カ之レヲ促進サセタコトハ敢テ云フヲ待タヌ、獨逸カ其一般政策上ノ見地カラ東部國境ノ脅威ヲ減殺スル爲露國ノ極東進出ヲ希望シ、又其進出ヲ或程度迄誘掖煽動シタノニハ相違ナイカ、三國干涉前後ニ於ケル獨逸ノ策動ハ、主トシテ自家領土慾ノ達成ヲ基幹トシテ案梅サレタト見ルノカ至當タト考ヘル。

第十二章 英國ノ極東政策

日清戰後ノ日英關係——日英同盟ノ機動ト其消散

大分長ク獨逸ヲ中心トシテ極東問題ヲ話シタカ、今度ハ英國ヲ中心トシテ研究シテ見ヨウト思フ。如何ナル國テモ其利益ヲ度外視シテ外交政策ヲ樹テルコトハ斷シテ無イカラ、一國ノ外交方針ハ極端ナ言葉ヲ用キレハ利己主義ヲ基幹トシテハ居ルカ、之レヲ露骨ニ標榜シ輿論ノ惡感ヲ購フ様ナコトヲスルノハ、拙劣ナ外交テ多クノ敵ヲ作リ、之レヲ鋒銛ニ現ハサス世相ニ迎合シ又他國トノ利害ヲ考察按配シテ善處スレハ、其ノ外交ハ世論ノ贊同ヲ博シ好結果ヲ收メ得ルノテ、古今ヲ問ハス洋ノ東西ヲ論セス自國ノ利益ヲ無視シタ外交ノ在ル筈ハ無イノタカラ、二國間ノ話シ合ヒハ相互ノ利益カ一致スルカ又ハ一方カ多少其利益ヲ犠牲トスルモ之ニ代ハル他ノ利益ヲ收メ得ルノテ無ケレハ纏マル譯ハナイ。日本ト英國トノ關係ニ就テ見ルニ日清戰爭ノ中頃迄、英國官民ノ態度殊ニ其極東艦隊司令官ノ態度ハ決シテ我國ニ好意的テ在ツタトハ思ヘヌ。夫レカ三國干涉ニ加ハラナカツタノテ、我輿論ハ之レヲ德トシ親善的トナツタカ、英國カ干涉不參加ニ決シタ原因ハ前ニ述ヘタ通リテ、我國ニ對スル好意カラ採算シタ點ハ殆ント無イト云フテ良イ。然シ日本カラ見レハ英國ノ此態度ハ確カニ我國ヲ八方塞リカラ救ツタニ相違ナキ故、之レヲ感謝スルノハ尤ナコトテ、利害ノ一致點ハ正ニ此間ニ見出タサレルノテアル。換言スレハ英國モ亦日本ト同シク清國ノ領土ヲ保全シ其門戶ヲ開